
歪みの町の悪魔

元松きゆな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪みの町の悪魔

【Nコード】

N4844Y

【作者名】

元松きゆな

【あらすじ】

歪んだ人達が集う「宮野市町」。そこに住む「黒井簞流」と言う悪魔の子は、町で起こる猟奇殺人事件などに巻き込まれながらも解決していく…。

1、通り魔（前書き）

グロテスク、流血表現があります。
苦手な人は避けてください。

1、通り魔

チユンチユンと、僕の窓から鳥の鳴き声が聞こえてくる。いつもどおりの朝だ。僕は起きたばかりの体を無理矢理起こし、重たい瞼をこすりながら学校へ行く準備をする。見慣れた制服に袖を通しておばさんが朝食を作って待っているリビングへと足を運ぶ。

味噌汁の匂いが僕の鼻についた。割烹着を着てキッチンに立っている20代の女性は、僕のお父さんの妹「黒井えみ」。僕をひきとってくれた。精神科の医者をやっていて、若くて優しい僕のお姉ちゃんみたいな存在だ。

「あ。おはよう聳流くん。」

「おはようおばさん。今日は仕事ないの？」

「今日は休み。はやく食べないと遅刻するわよ？」

「あー!!いけない!!」

遅れたけど、僕の名は黒井聳流。茶髪の短い髪に童顔、丸い茶色の目が気になっている男子高校生。あ、あと身長が低いことも。

両親は仕事の都合で僕を叔母さんに渡し、この静かで大きな町「宮野市町」に引っ越してきた。新しい学校にも慣れて普通に暮らしているけど……だんだんとこの町で暮らしてきてわかったことは、この町は歪んでいる。

言葉どおりの意味だ。この町に住んでいる人は少ないけど皆歪んでいる人ばかりだ。学校の生徒にも、そんな人がたくさんいる。まあ、僕も歪んでるから言えないけどね。ただ僕の場合はその歪みを表に出さないタイプだ。悪魔で「常識人」でいるように。

「ご馳走様!! 行ってきます!!」

「いつてらっしやい。髪くしゃくしゃだけど。」

叔母さんの声を背中であきながら僕は学校へと足を急ぐ。

ほんとは行きたくないけどね……。

宮野市高等学校。僕が通う学校だ。

この高校にはたくさんの部活があり、その理由でこの高校に通う人もいる。僕は何も入ってないけどね。一見普通の高校だけど、言ったようにこの学校の生徒には「歪み」を持っている生徒が少ないが居る。最悪、僕の教室にはそれがたくさん居るんだけど…。(僕も入っている)

「聳流くんおはよう。」

「おはよう！今日も良い天気だね。」

猫かぶりをしている僕には誰も僕の正体には気付いていない。まあ、知られてもいいけど。

「聞いた？最近通り魔が現れるんだって。」

「知ってる。包丁とかで刺して襲うんでしょ？まだ犯人捕まってるから、不安だね。」

…とか言って、ほんとは不安してないでしょ。僕は女子の会話に心の中で毒を吐いた。

女子の会話どおり、最近この町では通り魔が現れる。夜一人で帰ると、包丁を持った男が無差別に襲いかかるらしい。まあ、そんな時間帯にまで一人で歩くのも馬鹿だけだね。

「もしかしたら、深井さんかも…」

「しー！聞こえるでしょ？」

その言葉に、僕はちらりと後ろの席を見た。

骨みたいに細く、暗くて黒縁眼鏡を掛けた浮いた男子「深井とおる」。

クラスでは皆に毛嫌いされている。声も小さくて、いつも隅っこで立っているから、皆あまり話したがらないのだ。僕はどうでもいいけど。でも、皆は通り魔の犯人は深井だ、と口々に言っている。どうしてそう言うのかは、僕も知っている。

深井は、小さな生き物を殺している。金魚、猫、犬、蛙、へびなど。誰にも気付かれていないとも思ったのかな？悪いけど、大半の生徒は知ってるから。僕も実際見た事あるし。深井が猫をアイスピックで殺すところ。（殺された猫の死骸は僕が埋めた）

それから、通り魔が現れたら皆、「深井が通り魔かも」って言い出した。まだ証拠もないのに、よくそんなこと言えるよね。まあ、否定はしないけど。

こんな人間が居る「宮野市町」。僕にとって、ぴったり合っているのかもしれない。

両親も、僕をここにやったのもわかっているしね…。

そう思っていると、担任の先生が入ってきた。ここから、学校での日常が始まるんだ。担任の言っている言葉をおとなしく聞いていると、背後から少しだけ視線を感じた。背後の席は深井の席だ。深井が僕を見ている？僕はちらつと後ろを見ると、深井が血走った目で僕をじつと見ていた。息も心なしが荒い。どうして僕を見るんだろ。見ないでくれないかな。すると僕の視線に気付いたのか、深井はさつと下を向いた。なんだったんだろう。

「最近通り魔が出没しているらしい。皆、気をつけるんだぞ。」
「だったら早く犯人を捕まえるっての。警察も何やってんだろうね。」

まあ、期待はしてないけど。

「お？黒井聳流じゃねえか。」

学校が終わって、僕は振り返りに近くにあったコンビニへと足を運ぶと、僕の苦手な男が漫画本を読んでいた。

「…くんばんは！山崎さん。」

黒のよれよれスーツに白い運動靴。ボサボサの黒髪と顎鬚が良く似合うこのおっさんは「山崎茂^{やまざき しげのぶ}」。刑事さんなんだ。け、い、じ、さ、ん、なんだ。大切なことだから二回言っちゃった。

叔母さんとは長いこと付き合っている恋人で、僕と認識がある。…いつも会うと「お前相変わらずちっさいな！」と、僕が気にしていることをザクザク言うので、あまり好きじゃない。ほんとにこの人は刑事なのか疑うよ。

「どうした？牛乳でも買いにきたのか？」

「違うよ！…山崎さんは？仕事じゃないの？」

「サボりだ。」

…あんた刑事なんてやめてしまえ。通り魔が出没しているのに。一回刺される。

「最近仕事が忙しくてな。休む時間なんてないんだよ。えみはどうしてる？」

「普通だよ。何も変わってない。」

「ははっ！…そうかそりゃあ何よりだ。お前も元気そうだから安心したよ。」

そう言つて山崎さんは僕の頭を撫でた。…背が縮むよ。

「あ、そうだ。なんか買ってやるよ。」

「ほんと？ヤッター！！」

これだけは山崎さんには感謝する。

「そういや、このところ通り魔が現れるんだってな？」

「え？…うん。僕怖くて寝れないよ。(嘘だよ)」

「本当に怖がりだなお前は。まだ俺たちは通り魔の証拠も掴めていないし、上司は俺たちに押し付けっぱなしだ。そんなんで捕まるかっての。」

そういうあなたはサボってるじゃん。と、心の中で毒つく。

「俺も自分で調べてるんだが、なかなかそう言ったもんはなくてな。わかったことは、犯人の服装と凶器ぐらいだ。」

「犯人の服装と凶器？」

ちよつとそれに気になった僕は黙って山崎さんの言葉を聞いた。

犯人は丈の長い黒コートを着ており、凶器は時々変わることがあると被害者の証言でわかったらしい。凶器は包丁、ナイフ、アイス

ピック：あれ？アイスピック？

「バタバタ働いての、俺の睡眠時間はなかなか無い。疲れたぜ。」

「ふうん…山崎さんもたいへんだね。それより、なんか買つてよ。」

「ああ！そうだそうだ。何が良いんだ？アイスか？お菓子か？」

僕はお菓子10個を山崎さんの自腹で買わせてもらい、「送つてやろうか？」と山崎さんは言つたけど、僕はこれでも男だから一人で帰ることにした。

外は夕日がもう沈んでいて、道を歩く人はだんだんと少なくなっている。街灯が少なく、人気がない道にも暗い闇が広がっていた。けど僕は暗いのは嫌いじゃないから平気。

その時、僕の後ろから人が襲いかかってきた。人を飛ばすくらいの勢いだ。僕はぎりぎりで襲い掛かってきた人を避けた。

丈の長い黒コートを着ている男…。山崎さんの言っていた「通り魔」だ。確実に。だって、手には包丁が握られていたから。それで僕を刺そうとしたんだ。

「ひどいなあ。こんな夜道で僕を襲うだなんて。深井くん？」

やっぱり。今ここに居る通り魔は「深井とおる」だった。暗くても見えなかったけど、この顔は深井だ。顔は汗で濡れていて、息もなんか荒い。興奮してるの？

「なんで僕を襲うの？僕悪いことしてないよ。」
すると、深井は小さな声で言った。

「……から」

「はい？」

「居たから、殺そうしただけ、だ」

つまり、僕には恨みは無く、ただここに居たから襲つたのね…。
「ばっかじゃない？」

ここで僕の本性が出た。深井は少し驚いている。

「あんた、殺すならもうちよつと計画立てたら？こんなのに手こずる警察もなただけ。小動物を殺してきたのは、人を殺すための準備だったわけだ。なるほどねえ。だからアイスピックなんだ。そこ

はよく考えたね。でも、有名な推理小説みたいな難事件を作れるほど、君はそんなに天才じゃないからこんなことしても無理だよ。だつて…」

この通り魔事件で、死んだ人は居ないからね。

「うるさ、い」

「殺すんだつたらもつと力を入れてやらばきや。怯えなんてだめだよ。」

「うるさい！！！」

深井は怒ったのかわからないけど、包丁をブンブン振り回しながら僕に襲い掛かってきた。けど僕はそれを避け、隙を突いて深井の腹に蹴りを入れた。深井は盛大に飛んで電柱に激突した。

「殺人を甘くみないことだよ。…僕の腹に包丁刺したことは少し悔しいけど。」

僕は腹に刺さっている包丁を抜いて、気絶している深井に返した。

「まあ、僕はこのなので死なないけど。」

そう言つて、僕はポケットから携帯を取り出し、山崎さんに電話した。

「山崎さん助けてえ！！通り魔が襲ってきたあ！！！」

この演技、辛いんだよなあ。仕方ないよね。僕は本性をあまり知られたくないし。

しばらくして、山崎さんが来てこの事件は終わった。あつけないね。

あと僕は腹に包丁が刺さったから、救急車に運ばれて入院してしまった。くそ、皆勤賞狙いたかったのに。

「凄い回復力だから明日退院だつて。よかつたわね。」

「うん！！これで、まずい病院食とはお別れだよ。」

入院してから四日。山崎さんから深井のことを聞いた。深井は今、

罪人たちが居るところに引越したそうさ。まあ、人を殺そうとしていたから当たり前だよな。

「聳流くんも、暗い夜道には気をつけてね。」

「はい。」

まあ、僕は平気だけどね。その時、おばさんの携帯が鳴った。

「ごめんね。」

おばさんはそう言うのと病室から出て行った。たぶん、あれはお母さんだ。

「もしもし。どうして来てくれないの？聳流くん、怪我をしたのに…またそんな…。あの子は優しいわ。考えすぎよ。…あの子は悪魔じゃない、人間よ。お金を送ってくれるのはありがたいけど、高校にも入学した聳流くんの姿を見に来てよ。もう、あれから10年になるから…」

おばさん。ごめんなさい。僕はお母さんの言うとおり…「悪魔」なんだ。優しい子じゃないよ？良い子じゃないよ？嘘ついてごめんなさい。

「いくらなんでも、なんでそんなことを考えるの。…あの子、立派な男の子よ。そんなにあの子を毛嫌いするんだったら、私がお母さんとして育てます。…じゃあね。」

おばさんごめんなさい。本当に僕「悪魔」なんだ。傷もすぐ治るし、人間離れた体力も持つてるんだ。だって、僕小さいとき、

ひとをころしたことがあるから……

「聳流くん遅くなってごめんね。リンゴ、食べる？」

「……うん!!」

僕の目に、涙が溜まっていたことは、秘密だ。

2、子供誘拐殺人事件（前書き）

流血表現があります。

2、子供誘拐殺人事件

僕がまだ6歳くらいの時だ。

このときは、お母さんやお父さんが普通に僕を愛してくれた。お母さんの美味しいご飯も食べれたし、お父さんと一緒に釣りをして遊んだこともあった。友達も居たしね。

でも、僕はそのときから「歪み」が始まっていたんだ。

「歪み」をわかったのは、ある雪が降る夜だった。僕の家のある公園に、一人の女の子がポツンとブランコに座っていた。寒い季節なのに、薄い服しか着ていない。僕はその子のことをよく知っていた。小学校の帰り道でよく見るから。なぜかその子の腕や足には沢山の痣があった。

僕は少し興味を持って、その子に近付いて聞いてみた。

「ねえ、どうして君は痣があるの？」

すると女の子は小さな声で。

「お母さんとお父さんが私を叩くの。」

その言葉に、僕は衝撃を受けたことは覚えている。お父さんとお母さんが、自分の子を叩くなんてショックだった。

「家に帰りたくないから、ここに居るの？」

「うん…」

「でも寒くて死んじゃうよ…？」

「それでもいいの…」

その言葉に少し僕は悲しくなった。僕と同じ歳なのに…。

「ねえ、隣のブランコに座って良い？」

「うん…」

「…君の名前は？」

「私？…私は…」

……
その子の名前は忘れたけど、この日から僕とその子は友達になっ
た。

…あの日まではね…。

「通り魔の次は誘拐事件？」

「ああ。最近事件が多いんだよー。」

今日は家に山崎さんが来ている。おばさんは愛しい彼氏が久しぶりに来たもんだから、手によりをかけておいしい料理を作った。…肉じゃがだけど。

そのときに、山崎さんが最近起こっている事件に愚痴をこぼしていたことから始まった。

まあ、この宮野市町で事件が多いのは僕も謎だけど。

「それが厄介なんだよ。誘拐した子供は何日かして見つかるんだ。

…死体になつてな。」

「え…どゆこと？」

「誘拐された子供は皆、殺されて何処かに捨てられるんだ。殺された子供には、体中に殴られた跡があつてな。暴力をされていた。それで死んだんだ。」

「ひどい…」

「犯人の物や姿も今掴んでない。まったく、いつになったら平和が来るのか…」

暴力…。僕はその言葉が頭の中で回っていた。どうしていたいけな子供に平気で暴力が出来るんだらう。最近の人間はおかしい。

あのときだって…。

「聳流くん、どうしたの？」

「え、ああ、山崎さんが怖いこと言うから…!!…!!」

「すまんねえ聳流く。おまえはほんとに怖がりだな。」
ほんとは怖くないけど。でもこうでもしないと嫌われちゃうから。
あ、山崎さん。その水が入ったコップは僕の。何飲んでんの…。

山崎さんが帰ってからもう3時間になった。(山崎さんはおばさんが作ってくれた肉じゃがを全部持って帰った。僕もいっぱい食べたかったのに…)

外はもう満月が浮かんで宮野市町を照らしていた。心なしか、外の気温も寒い。

なんだか満月を見ると…あの子を思いだすなあ。名前は忘れたけど、あの子の顔は今でも思い浮かべれる。初めてしゃべった日は、満月で雪が降っていたときだ。たしか寒くて震えていたあの子に、マフラーを巻きつけたっけ。

あの子のあの子の笑顔、可愛かったなあ。つられて僕も笑ったっけ。ほんの少ししかない時間だったけど、あの子としゃべってよかったって思ってる。

あの子…何してるかな。元気にしてるかな。もう10年経ってるから忘れてると思うけど。

「聳流くん!! 醤油がきれちゃった!! 悪いけど買ってきてくれる!?!」

「ええ!?!? やだよお!! 外寒いもん!!」

「買ってきてくれたらお菓子あげるわよ!」

「何処で買えばいいのー!!」

僕はお菓子に釣られ、醤油を買いに出かけた。コートを着てマフラー巻いて、防寒対策OKの状態で家から出た。僕の吐いた空気は白い霧となって消える。もう空気が白くなるなんて…冬になったんだとあらかじめ実感した。なんだろ…またあの子の顔が浮かぶよ。

また、会いたいなあ。無理な話だけど。

電灯が照らす道を歩いていると、横目にある公園に目を向けた。

その公園のブランコに、男の子が座っていた。一瞬その男の子が、あの子と重なって少し驚いたけど、ふと疑問が頭をよぎった。こんな暗い時間に、小さな男の子が居るなんて…。僕は公園に入ってブランコに居る男の子に近寄った。

「ねえ、君どうしたの？」

もちろん、男の子は驚いたけど、小さな掠れた声で言った。

「お母さんが、仕事で居ないから…」

「お父さんは？」

「……」

ちよつと酷なことを質問しちゃった。

「でも、帰らないと危ないよ？最近君みたいな子供を誘拐する悪い人が居るから。」

「…うん。わかった。」

素直に、男の子はブランコから離れると公園から出て行った。僕が送ってあげようとしたけど、男の子は走って消えてしまった。

「…あの子みたい…」

これは偶然？男の子があの子と重なって見えた気がした。

「恋しいのかな…」

僕はポツリと言つと、誰も居ない公園から出て行った…。

久しぶりに寝坊をしちゃった。僕は目覚まし時計が壊れていたことがわかって、朝っぱらから僕は激怒して目覚まし時計をゴミ箱に思い切り捨てた。新しいのを買わないと。

「おばさん！！目覚まし時計が壊れちゃった！！放課後買いに行くからお金ちょうだい！！」

「ええ！？…しょうがないわね。次からは壊れないものにしてね。」

「ありがとー！！いつてきまーすー！！」

「ちよつと、朝ごはんー！！食パンかじって行きなさいー！！」

そう言うとおばさんは僕の口に食パンをつっこんだ。… 苳ジャムが鼻に付いたよ。

僕は食パンをくわえながら学校に行くことに。どっかの女子高生？なんて、考えてないよね！？いつもの道を全速力で走っていると道端に人がたくさん集まっていた。そこには警察も居る。僕は「邪魔だなあ」と思いながら人ごみを別けて進む。そのとき、中年のおばさん同士の会話を偶然聞いてしまった。

「また子供の死体が置かれていたんですって。」

「5日前から行方不明になった金井さんとこの子供だそうよ？しかも、顔に殴られたような痣があつたって…」

「もうこれで6件目…最近怖い事件が続くわねえ…」

ああ。子供を誘拐しては虐待して殺すあれか。ひどいことをする人間がこの町に居ると考えると嫌な気分になるよねえ。どうなってるんだよ、この町は。

朝から災難なことばかり。もしかしたら、今日は最悪な日になりそうだよ。

それが的中する。放課後に。

目覚まし時計を買いに、いつもと違う道を歩いたのが始まりだった。人気のないさびしい住宅地の道を歩いてスーパーに行く。こっちの道がスーパーの近道だと昨日わかった。でもあまり通らないから迷ってしまうかも知れないから気をつけないと。

そんな道を歩いていたらときだった。あるボロボロのアパート（地震が起きたら壊れてしまうんじゃないか？というくらい）の階段に昨日の公園に居た男の子が座っていた。もしかして、このアパートに住んでいるのかな。

「君、ここに住んでるの？」

僕が男の子に近付いてたずねたけど、男の子はコクリと頷いただけで声はだしてくれなかった。別にいいけど。

「お母さんは、仕事なんだ。」

またコクリと男の子は頷いた。鍵とか開いてないのかな？だからここに座っているの？…母親は何してんのかな。まったく。

「じゃあね。僕用事があるから。知らない人にはついていっちゃダメだよ？」

そう言うつと僕は男の子から別れた。ちょっと心配だけど、まだ明るい時間に誘拐とかないよね？

僕は何気に男の子の方へと振り向いた。男の子は、大型の体格をした中年の男に軽トラに乗せられてしまった。

「え！！？あ、な！！！」

突然のことだったから少し僕は慌てた。軽トラは僕に向かって猛スピードで突進してくる。僕は難なく軽トラを避け、その荷台へと僕は乗った。体を伏せて見えないように。幸い、男は気付いていない。

まさか、僕の目の前で誘拐なんてものが発生するとは思わなかった。男の子の声はあまり聞こえない。まあ、無傷なら良いけど。

ところで、僕たちを乗せた軽トラ。どこまで行くんだろうか？

顔に冷たい風が当たりながら僕はそう思った。

古く落ちぶれた廃ビルに、軽トラは止まった。男は軽トラから降りて男の子を引っ張って廃ビルの中へと入った。ここで何するんだろう。僕はとつさに荷台から降りて廃ビルの中へと入る。廃ビルはガラスというガラスが全て割れていて、廊下にはたくさんのゴミが散らばっていた。よくこんなところに居れるよね。

そのとき、二階から何かを叩く音が聞こえてきた。足音が聞こえないように慎重に階段を登る。階段を上りきって二階の廊下を見ると、ある一室に薄い光が漏れていた。僕はその一室に近付き、少し開いている扉の隙間から中を覗いた。

大型の体をした男が、男の子を荒れた手で叩いていた。男の子はその痛さに涙を浮かべている。

「餓鬼が…小さいからって生意気言いやがって…」

そう呻くような声で、男はさらに男の子を叩く。「痛いよ…。」という男の子の声を無視して。

「大人がどれだけ、おまえらを養っているのか…わかってんのか？」

「痛いよ…おじさん」

「痛い？…ピーピーピーうるっせえんだよ！！」

そう言つと、男は拳で男の子の頭を叩いた。

この光景、見たことある…。

そうだ。あの子の家に遊びに行ったときだ。公園で知り合ったあの子と毎日遊んで、あの日、あの子の家族が居ない日だったから、僕はあの子の家で遊ぶことになった。アパートだったよね？家の中はビールの空き缶だらけで汚かったけど、あの子が持っていた人形で遊んでたからそんなの気にしなかった。楽しかったから。でも、しばらくして遊んでいると、階段を登る足音が聞こえてきたのに気付くと、あの子は僕を押し入れの中に隠した。

「何があっても、ここから出ちゃだめだよ？」

あの子はそう言つて、押し入れの戸を閉めた。ちょうどそのとき、玄関の開く音と一緒に、男の怒鳴り声が聞こえた。あの子の泣きそうな声も聞こえたから、僕は気になって押し入れの戸を少し開けて覗いた。

あの子の父親だろう、男はあの子の髪を引っ張って叩いた。傍に居た母親らしき女は、ビールを飲んでその行為をじつと見ていただけで何もしない。男はなおも、あの子を叩いてばかり。

その光景に、僕の心の中から何か重いものがこみ上げてきた。顔を腫らして泣いているあの子の顔を見ると、男と女に対して無償に腹が立つてきたことがわかる。もう叩くの止めてよ。あの子が泣いてるんだ。ねえ止めてよ。泣いてるんだ。痛いんだ。どうして叩くの？親でしょ？あの子が何したの？憎いの？八つ当たりなの？お願い止めて？止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて止めて！

!!!!!!

止める!!!!!!!!!!!!!!

男は泣いているあの子に、手元にあったグラスを投げつけた。グラスはあの子の頭に当たって割れ、あの子の額をグラスの鋭利な破片が裂いた。額から血が流れた。でも男はお構い無しに、次はフライパンであの子の頭を叩いた。鈍い音が僕の耳に響く。あの子は体をぐったりさせ、額から流れている血が、白いカーペットをじよじよに染めた…。

それを見た瞬間、僕の中で何かが弾き飛んで…。

僕は勢いよく扉を開け、足元にあった鉄パイプを掴むと、男の頭に振り落とした。

「ぐう!!!?」

男は頭を抑える。でも僕はお構い無しに鉄パイプをまた振り下ろした。

「痛い? 苦しい? 怖い? 今どんな気分かな? あんたでしょ。今まで子供を誘拐して虐待して殺したのは。無知な子供を叩いて殺して、楽しかった? 何が憎いかわからないけど、子供を殺すなんて…」

許さない。僕はそう言うと、また鉄パイプを振り下ろす。男の子は気を失っていた。よかった。この現状を見たら、心に傷を作っちゃう。

「力の無い子供を虐待して……死ねよ。」

男の体がピクピク動いている。もうダメかも。でも僕は何回も何回も鉄パイプを振って、気付いたら辺りは赤く染まっていた。男も動かない。

ああ。あの子みたいに殺しちゃった。

大人を殺しちゃった。

あの子の姿を見て、僕は押入れの中に置かれていたサバイバルナイフを無意識のうちに掴んで、それで男の背中に突き刺したんだっけ？悲鳴を上げる女の喉にも、ナイフを突き刺して…。

気がつくと、辺りは赤くなっていた。赤くなつたナイフを捨てて、僕はあの子を抱きかかえて交番に行った。おまわりさんは赤くなっている僕たちを見て驚いてたっけ？

そのあとは、僕が殺したのに警察の人は「通り魔による殺人事件」として片付けられた。あの子はおまわりさんと一緒に病院に行った。それが、僕たちの別れだった。

お母さんとお父さんが交番に来て、僕が駆け寄ると…。

「あ、悪魔！！！」

お母さんがそう言うと、僕の伸ばした手を払い退けた。二人は僕を見て怯えていたんだ。どうして悪魔と言われたのか、その時はわからなかった。でも、ガラスに写っていた自分の姿を見て、「ああ、そうなのか」と冷静に確信した。

僕は、二人の返り血をたくさん浴びていた。顔も服も足も。

そして、僕の左の耳下に、「666」という小さな文字があった。666という文字は悪魔の文字。そんなことを友達から聞いたことがある。

…悪魔なんだ。僕って。

その日から、僕は歪みを知った。

「ぐ…う…」

「あれ？生きてる？」

男が生きていた。目を閉じてたから、僕の顔は見えていない。僕は血で濡れた鉄パイプと男の子を持って廃ビルから出ていった。男はたぶん体を動かせない。男の子は交番とかに置いていけば大丈夫だ。「はあ…まさか久しぶりに殺そうとしたよ…僕ってほんとに怖いね。」

キレた衝動で殺るなんて。本能的にもほどがあるよ。

僕は男の子を誰にも気付かれないように交番に置くと、犯行で使った鉄パイプを誰も寄り付かない山に埋めた。深く掘ってね。時計を見ると、もう時刻は7時になっていた。はやく帰らないとおばさんが心配する。僕は何事も無いような顔で道を小走りした。しばらくして、家から救急車の音が大きく響いた。おばさんは「事故でもあったのかしら？」と言ってたけど、僕は「わかんない」と言ってお味噌汁を啜った。

今日の朝は子供誘拐殺人の犯人逮捕でテレビは騒いでいた。交番の前に気を失っていた男の子がおまわりさんに見つけられ、犯人が居るとされる廃ビルに行くと、犯人は頭から血を流して倒れているところを発見。幸い、生きてはいるけど意識不明の重体となって病院に搬送された。犯人を襲った者の痕跡は無く、警察は「何かの事故で頭を強打した」として片付けられた。

ほんと、全力で捜査してないよ。そんなわけで、僕は普通に学校に通えた。あの日以来、男の子のことはそれからどうなったのかは知らない。まあ、知ってもなんにもならないけど。また普通の日常に戻るだけだから、気にしない気にしない。

教室につくと、女子が固まって何か話をしていた。

「今日、転入生が来るんだって。」

「へえ！！男かな？」

「残念！！女の子だってさ。」

こんな時期に転入生？へえ、珍しいね。ていうか、なんでこんな町に来るんだろうか。何も良いことないのに。

すると、担任の先生が偉そうに入ってきた。

「遠い町から親の事情でこっちに来た転入生を紹介するぞ。」

もう女子なんていいよ。男子の数が減るだけなのに。

「入れ。」

誰かはわからないけど、あまり関わりを…。

もちたく、な、い、、、え？

「皆、仲良くしろよ？」

教室に入ってきた転入生に、僕は目が飛び出るくらいに目を見開いた。

肩までの短い黒髪、形の良い丸い黒目、「美少女」という言葉が似合う顔立ち。

でも僕は、彼女の額にある不釣り合いなものを見て驚いたんだ。

彼女の額には、横線の大きな切り傷が前髪から覗いていた。その額の傷は…。

『…君の名は？』

『私？…私は…』

「愛川百合あいかわゆりです。よろしくお願いします。」

あの、子？あの子？あの子！！！！？

「席は黒井の隣だ。何かわからないことがあったら質問しろ。」

「はい。」

うつうつ嘘だ嘘だ。あの子がここに来るなんて。夢を見てるの僕？

ここはまだ夢の中なの？夢であって欲しい。あの子の両親を殺した犯人と同じ町に来るなんて…あり得ないことだ。

「あの…」

「！！！！？」

「よろしくね…」

彼女の笑顔を見て、夢じゃないという言葉が頭の中に貫通した…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4844y/>

歪みの町の悪魔

2011年11月17日03時20分発行